

石による空間構築への軌跡

- 流転するリズム -

東京藝術大学大学院美術研究科
博士後期課程美術専攻油画研究領域（壁画）

学籍番号 1317909

谷本 めい

論文要旨

本論文は、私が「石」という素材と出会って以降、壁画技法研究や制作、滞在制作等による実践的な経験を通じ、それまでの絵画表現から石による空間創造へと変容していった表現の軌跡を辿る制作論文である。そして、今後の作品制作の指標となることを目的としている。

私は、身体を通して実感できる体験から創作を続ける中で芽生える発見や気づきに関心を持ち、石や自然を介して生まれる感情や表現に導かれながら制作する行為が何を生むのか思考している。

本論の副題にある「流転するリズム」とは、私の制作理念である。そのリズムとは、自然と自身の制作プロセスの循環関係を示している。それは、「石に寄り添う」ことから始まり、身体を通して「石」と対峙することの繰り返しによって感じる事が可能となる。

私たち人間は、リズムある日々をそれぞれ過ごしている。そのリズムは生活を乱しかねないが、見方を変えれば世界が拡張し、見えなかったリズムを見ることができるということでもある。例えば、ふと広大な海を眺め、大きなリズムに包まれた時、忙しく過ぎていた時間の流れがゆっくり変化し、地球の動きさえ感じることができる。朝陽を浴びた時、1日の始まりを感じる。植物の成長に気づいた時、生きるためのリズムを見る。石にまみれ、身を置いた時、石が過ごしてきた途方もない時間（リズム）を感じるのである。

科学技術の発展によって急速に環境が変化し、便利になった現代において「見る」という行為は、視野の狭い観察になる傾向にある。今一度、自然や環境への洞察を深め、見直し、そこに秘められたリズムについて再考すべきである。「石の世界」を通して改めて視野を広げると、表面的な事柄だけでなく、そこに内包された想像を超えた時間や緊張感が明らかになってくる。そして、そこで展開される様々なリズムの断片を繋ぎ合わせ、モザイク技法を用いながら、環境の中で空間を構築するという制作の意義をこの論文を通して紐解いていく。

本論文は全3章と、序章、終章を含む構成で論考を進める。

第1章 「石-痕跡」では、なぜ私が石に惹かれるのか、石と五感の関係や、自然が石に干渉する事柄について例を挙げ、石の魅力について確認した。そして、「石と人」が過去においてどのような結びつきによっ

て共存してきたのか、その変容の歴史を「積み上げる」「彫る」「配置する」「嵌め込む」という観点から、石による美術表現を取り上げ、自身の制作と重なる点や石のエネルギーについて明らかにした。

第2章「流転するリズムとは何か」では、テニスの経験や幼少期の体験を踏まえながら身体と自然のリズムの関係について思考した。自作《Pantarchy》を基点に変容するリズムの軌跡を追う。作品と環境の関係について検証する契機となった自作《海のゆりかご-耳を澄まして-》では、内と外から鑑賞する視点の転換や、屋外設置によって自然のサイクルと作品が共鳴し、多様な石の表情を感じることができた。この経験から西洋と東洋の庭園の在り方、中でも自然と調和を図った「枯山水」に着目した。そこで、他者の作品と、「調和」と「流動」の融和を図った自作《貝底園》とを比較しながら双方に通底する精神性や心理的特徴を分析した。また、石への表現を追求している時、私はある茶室の石に出会った。その石は、人の手が加わっているにもかかわらず、野生美が失われることなく存在し、刻一刻と自然光に揺らぎ変化するリズムに、私は大きな感銘を受けた。

このような体験を通し、石が環境と密接な関わりを持ち、如何に土着の文化を生み出してきたのかを探るため、中国敦煌での滞在制作を試み、より実践的な関わりから作品を構築することへと展開した。その結果、私の制作プロセスが、大地の輪廻図（プレートテクトニクスから見た岩石の地質学的サイクル）に類似することに気づき、双方を比較しながら図で解説した。さらに人と場の関係性について新たなアプローチで追求するために提出作品へと展開した。

第3章「石による空間構築-博士提出作品《痕跡の海》」では、新たに出会った方解石という素材により、場と関わりながら空間を構築した提出作品の制作工程を解説した。この作品は、山口県にある大理石鉱山での滞在制作から始まる。まず、作品素材である方解石の持つ特殊な性質について触れつつ、その特性に寄り添い、自らが石を理解していく過程を解析し、変化していくリズムの構造について考察した。

次に、方解石を用いた制作が特定の環境の中でどのように場と関わりながら空間を構築したのかその過程を具体的に論じた。

最後に、《痕跡の海》を通して、石による空間構築が結果として鑑賞者にどのような効果をもたらし、「流転するリズム」が誕生したのかを提示した。

終章では、これまでの道筋を振り返り、結論を述べた。また、本稿に基づいた制作過程で生まれた今後の課題や展望を語り、論を閉じた。